



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「ドイツ文筆家保護連盟」(Schutzverband Deutscher Schriftsteller)活動史(1909-1933)― 文学研究における社会史的試み ―
Author(s)	真貝, 恒平; SHINKAI, Kohei
Citation	独語独文学研究年報, 33, 22-47
Issue Date	2006-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/18955
Type	departmental bulletin paper
File Information	33-22-47.pdf



「ドイツ文筆家保護連盟」
(Schutzverband Deutscher Schriftsteller)
活動史(1909-1933)

—— 文学研究における社会史的試み ——

真貝 恒平

0. 序論

今日、作家の創作行為によって生み出される「文学」は、社会の中で確固とした活動領域を獲得し、固有の規則、論理、コードをもっている。作家活動は単に机上の個人の行為としてではなく、映画、ラジオ、劇場などのメディア産業、書籍出版社による作品宣伝、公共機関（連邦、州、都市レベルでの各文化機関）等による文化支援との関わりといった、多様な社会的要因との影響関係の中で営まれ、今や作家は「文化の担い手」として社会に定着しているのである。

しかし、社会活動の一端を担う存在である一方、作家は社会の関係の網目の中にきれいに収まり切れてもいない。社会的地位について考えてみると、例えば、職業という枠内に収まらない文筆家¹の存在の曖昧さ——これが社会における文筆家の存在を曖昧にさせる原因となってきた——、より具体的に述べると、文筆業を本業とする「職業文筆家」(Berufsschriftsteller)の経済的安定の確保等の問題がある。また、「商業性」と「芸術性」、「美的価値」と「市場価値」の相克、時代や社会の支配的文化傾向に対抗するサブカルチャーと、高尚な文化として位置づけられている文学活動との拮抗、といった文筆家の生み出す作品、あるいはその創作行為自体をめぐる社会的評価の差異も、今日の彼らが置かれている社会的地位に少なからず影響を及ぼしている。文筆家の自己了解もこうした社会的地位の揺らぎに呼応し、依然、一定の解釈の幅の中を揺れ動いている。つまり、創作行為を「職業」(Beruf)という意識のもとで行っているか、あるいは天から与えられた一種の才能として、いわゆる「天職」(Berufung)として行なっているかという二律背反の文筆業における概念が常に存在しているのである²。このような文筆家の側面を考慮すると、文筆家は一定の社会関係の枠内で揺らぐ存在形式をもつと言える。

このような事象は、決してドイツだけに限定されるものではない。したがって、現代における文筆業の問題全般に対する関心が、本稿の主要な部分と密接に関連していると言える。こうした現代の文筆業のあり方の編成期とみなされるのが、帝政ドイツ期から世紀転換期を経てワイマール共和国期までの約60年間である。この間、都市化、大衆化、メディアの発達という現代社会を考える上で重要な変化がドイツでは現れる。そして、それと並行して現代に通じる文筆業の原型が形成されていったのである。その際、注目すべき現象が起こる。ドイツでは19世紀後半から文筆家団体設立の機運が全国で高まりを見せ、いくつかの文筆家団体が設立される。つまり、19世紀後半から文筆家という職業を、経済的な社会活動として位置づけるための基礎整備が、

¹ 本稿では、文学作品を執筆する一般的な意味での「作家」あるいは「詩人」という名称に該当する人々の他に、新聞、雑誌に文学・政治批評、一般記事を掲載することで生計を立てる「ジャーナリスト」、あるいは文芸雑誌の編集に携わる「編集者」と呼ばれる人々も研究対象とするため、これ以降、「作家」のかわりに、書く行為を生業とする人々を総称して「文筆家」という言葉を使用する。

² Vgl. Scheideler, Britta: Zwischen Beruf und Berufung. Zur Sozialgeschichte der deutschen Schriftsteller von 1880 bis 1933. Frankfurt am Main 1997.

各文筆家団体によって推進されてきたのである。そして、このような文筆家団体の活動を継承しつつもやがて主導的な立場を築き、これまでには類を見ない革新的な活動を展開し、この時期の文学活動を支え、今日的な意味での社会における文筆家の役割を強く訴え続けたのが、1909年に設立された文筆家団体「ドイツ文筆家保護連盟」(Schutzverband Deutscher Schriftsteller: 略称 SDS)であった。

【表1】「ドイツ文筆家保護連盟」(SDS)の主な変遷

1909年	「ドイツ文筆家保護連盟」(Schutzverband Deutscher Schriftsteller)設立
1911年	連盟綱領パンフレット『商品としての文学』(„Literatur als Ware“)刊行
1920年	正式名称に「ドイツ文筆家労働組合」(Gewerkschaft Deutscher Schriftsteller)という呼称が新たに加わり、労働組合へと組織転換
1933年	組織の解体⇒「ドイツ文筆家帝国連盟」(Reichsverband Deutscher Schriftsteller)へ吸収合併

SDSは、1909年に当時、ベルリンで活動していた作家、ジャーナリストを含めた「文筆業」(Schriftstellertum)に携わる人々、とりわけ文筆業を本業とする「職業文筆家」を構成員とする組織であり、文筆家の経済的苦境を打破することを目標に掲げていた。また1920年からはその組織名にさらに「ドイツ文筆家労働組合」(Gewerkschaft deutscher Schriftsteller)という呼称が加わり、当時、組織活動において主流であった「労働組合」(Gewerkschaft)へと組織転換を果たしている。SDSは、ワイマール共和国期には会員数は2,000名を超え、ドイツ国内で最大の文筆家組織へと発展を遂げるが、1933年のナチスによる権力掌握以降は、その傘下に創設された組織「ドイツ文筆家帝国連盟」(Der Reichsverband Deutscher Schriftsteller: 略称 RDS)に吸収合併され、職業団体としての自立性を失ってその活動に幕を閉じる。

この時代の各種文筆家団体およびこの時代に起こった文筆家の職業的再編プロセスについては既に前原真吾の『文筆業の誕生』(2004)がある³。しかし、ここでは対象をあえてこのSDSに限定し、その活動展開を詳細に追うことで、この再編プロセスの実体を分析してゆきたい。そのことによって、揺らぎを孕みつつも現代社会の中で一定の安定した社会的基盤を獲得するに至った歴史上のメカニズムや今日に続く文筆家という存在の問題性や方向性について、つまり、文筆家の〈社会的統合化〉の歴史動向について、より具体的に迫ってゆけると考えたからである。なお、SDSの歴史を単独に取り上げたものとしては、エルンスト・フィッシャー(Ernst Fischer)の„Der Schutzverband deutscher Schriftsteller“ (1980)⁴があるが、本稿では新しい資料をもとにSDSの歴史を文筆業の社会的再編という観点から新たに記述し直してゆきたい。

1. SDSの黎明(1909-1911) —— 設立から綱領パンフレット刊行まで ——

³ 前原真吾：『文筆業の誕生 —— 近代ドイツにおける文筆家団体の活動史 ——』東洋出版 2004年。

⁴ Fischer, Ernst: Der Schutzverband deutscher Schriftsteller. Frankfurt am Main 1980.

SDS 設立の発端は、1909 年 4 月にミュンヘンの地方紙『アルゲマイネ・ツァイトゥング』 („Allgemeine Zeitung“) の紙上で繰り広げられた、ハンス・ランツベルク (Hans Landsberg, 1875–1920)⁵と匿名執筆者による「文筆家の価値をめぐる議論」であった⁶。文筆業を「職業」と見なすか、あるいは「天職」と見なすかで両者は真っ向から対立する。

匿名執筆者は、文筆家にその源は古代ギリシアまで遡る、伝統的で「詩人にふさわしい」(dichterisch) 価値を付与している⁷。ここで、匿名執筆者が古代ギリシアから受け継がれてきた特別なオーラを纏った、司祭的、礼拝的作家像を持ち出してきたのに対し、ランツベルクは文筆家を「被雇用者」(Arbeitnehmer) と見なし、文筆家の現実的な経済的困窮を訴え、この状況を打破すべく、新しい文筆家団体の結成を呼びかけた⁸。これが、数ヵ月後に結成される文筆家団体 SDS 結成の引き金となったのである。その後、ランツベルクを中心に、当時、ベルリンで多くの文化人が集まり、盛況であったカフェ「オーストリア」(Austria) で何度となく文筆家たちの会合が繰り返され、1909 年暮れに SDS が設立されることとなる。

SDS は、19 世紀後半から世紀転換期にかけて、文芸市場の拡大によって引き起こされ、なお増加傾向にあった職業文筆家の受け皿になることを強く掲げていた。これには、競合団体である「ドイツ文筆家連盟」(Deutscher Schriftstellerverband: 略称 DSV)⁹や「全文筆家協会」(Allgemeiner Schriftstellerverein: 略称 ASV)¹⁰が、文筆業を本業としている者には有利に作用しなかったということも背景にあった。つまり、次のような文学状況の変遷が考えられる。19 世紀後半に都市化、出版メディアの産業化、高等教育の普及が急激に進行し、その結果、都市に文筆家予備軍が集まり、乱立する雑誌媒体を中心に生産過剰的な沸騰した文学状況がいったん出現する。DSV、ASV は、このような混沌とした文学状況の申し子であったプロ、アマチュアを含めた文筆家予備軍を組織に取り込み、19 世紀後半から世紀転換期にかけて設立されたのである。実際、両団体は入会審査の際、その人物が職業として文筆業を営んでいるかどうかということは全く問題にしていなかった。しかしやがて、このような文学状況の反動として、拡散した文学プロセスを職業文筆家中心によるものに収斂化させ、文筆家活動の標準基盤の再整備、および職業文筆家／アマチュア文筆家の二極化を推進する動きが、当時の職業文筆家の間で新たに

⁵ ジャーナリスト、劇場批評家。SDS 設立の原動力となった人物。ベルリン大学で文学、哲学、美術史を学び、1900 年に文学博士号を取得。その後、ベルリンでフリーのジャーナリストとして活動。さらに、雑誌『ベルリン日報』 („Berliner Tageblatt“) の専属劇場批評家として多くの演劇に関する記事を書いた。1914 年暮れに志願兵として戦地に赴き、その際に負った傷が原因で 1920 年に亡くなった。

⁶ SDS 設立までの経過の詳細は、拙論 真貝恒平:『ドイツ文筆家保護連盟の黎明——1900 年代におけるベルリンの文学風景——』北海道大学大学院文学研究科 研究論集 第四号 155～180 頁 参照のこと。

⁷ Allgemeine Zeitung, München, Nr. 17 vom 24. April 1909. S. 378.

⁸ Ebd.

⁹ 1878 年に設立された「全ドイツ文筆家連盟」(Allgemeiner Deutscher Schriftsteller-Verband: 略称 ADSV) と 1885 年に編集者ヨーゼフ・キュルシュナー (Joseph Kürschner, 1853–1902) によって設立された「ドイツ文筆家協会」(Deutscher Schriftstellerverein: 略称 DschV) が合併して 1887 年にドレスデンで結成された文筆家団体。文筆家の地位向上を目的に掲げて、ドイツで初めて全国的、国際的に組織された団体であった。1934 年まで存続。

¹⁰ 1900 年に編集者マックス・ヒルシュフェルト (Max Hirschfeld, 1860–1944) によって設立された。文筆家の利益向上を目指して、設立当初から 1934 年の組織の解体に至るまで会員数は常に 2,000 名を超え、ドイツにおける文筆家団体の最大組織として君臨し続けた。職業文筆家ではなく、ディレクタントを会員に取り込んだことから SDS と綱領面で対極に位置し、両団体間の争いは絶えることがなかった。

生まれてくるのである。SDS はまさに、19 世紀後半からの文学状況の変遷の中で文筆業において閉塞感を抱き、経済的困窮に苦しむ職業文筆家が自らの悲惨な現状を打開すべく設立した組織であった。

当時における職業文筆家の経済的困窮の大きな原因は、主に二つある。一つは、増加傾向にある職業文筆家の仕事の供給と、彼らを必要とする文芸市場の需要が一致しなかったことである。彼らは、同じ職業文筆家の他にも、さらに文筆業を本業としない「臨時文筆家」(Gelegenheitsschriftsteller)、「文学愛好家」といった文筆業界における「ディレッタント」(Dilettant)らと収入をめぐる競争をしなければならなかった。さらに二つ目として、出版者、編集者との劣悪な関係が挙げられる。当時の文筆家と出版社、編集者との関係は全く対等ではなかったのである。このような経済的困窮は、職業文筆家の存在をめぐる議論を呼び起こし、彼らに経済的重要性を認識する大きな契機を与え、新しい意識改革を引き起こしたのであった。

SDS の設立メンバーは、ランツベルク、ローベルト・ブローイアー (Robert Breuer, 1878–1943)¹¹、テオドーア・ホイス (Theodor Heuss, 1884–1963)¹²、ゲオルク・ヘルマン (Georg Hermann, 1871–1943)¹³ など当時、ベルリンで活動していた作家、ジャーナリストたちであった。彼らの多くは、職業文筆家のタイプを代表し、ペンによって生計を立てようと志す者たちであり、その文学的方向性はさまざまであった。彼らは平均年齢 35 歳と若い文学世代に属し、当時、ドイツの文芸市場の発信地であったベルリンへと、文筆業の職を求めのために赴いた地方出身者が大半を占めていたのである。また、多くが高い教養を備えたユダヤ系統の文筆家であった。さらに SDS の特色として挙げられるのは、文筆家の経済問題を最優先事項に掲げていたということである。つまり SDS は、文筆業における文学的創造性よりも、純粋に文芸市場における職業的成功を重要視したのである。

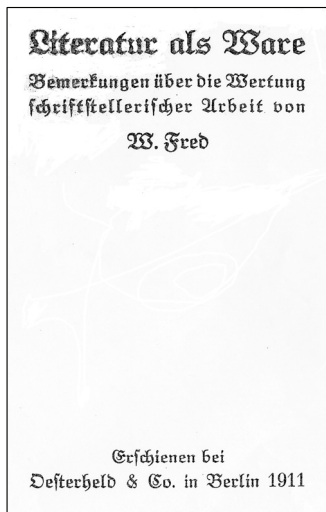
SDS は、1842 年の「ライプチヒ文士協会」(Leipziger Literatenverein) から始まるこれまでのドイツで結成された文筆家団体と、一線を画する存在であった。その最も大きな要因であったのは、SDS が、設立当初から、文筆家団体史上初となる「労働組合」への組織転換を目論んでいたことである。労働組合は、ドイツでは 19 世紀後半から世紀転換期にかけて、急速な工業化、産業化に伴って飛躍的な発展を遂げた。SDS は、自分たちの労働条件、賃金支払いの改善

¹¹ ジャーナリスト。SDS 設立メンバーの一人。雑誌『世界舞台』(„Weltbühne“) に美術、政治に関する記事を掲載し、1918 年には帝国宰相官房の新聞情報局長を務めた。SDS 内では、1913~20 年まで常に執行部の重要ポストに就き、ウルリッヒ・ラウシャーと共に長期政権を築いた。

¹² ジャーナリスト、政治家。SDS 設立メンバーの一人であり、初代副代表。1925~26 年には代表を務めている。政治ジャーナリストとして働いていたが、1912 年に「進歩国民党」(Fortschrittliche Volkspartei) に入党したのを機に政治家への転身を図る。民主主義的政治信条をもち、1924~33 年まで「ドイツ民主党」(Deutsche Demokratische Partei: 略称 DDP) の国会議員を務めた。戦後の 1949 年には、西ドイツの連邦大統領に就任した。

¹³ 小説家。SDS 初代代表。ベルリンのユダヤ系商人の家に生まれ、大学で経済学、美術史を学んだ後、小説家を志し、ベルリンのいくつかの美術雑誌に批評、短編小説を掲載する。1906 年に発表した歴史長編小説『イエットヒェン・ゲーベルト』(„Jettchen Gebert“)、さらに 1908 年にその続編『ヘンリエッテ・ヤーコビ』(„Henriette Jacoby“) は、ベストセラーとなりワイマール共和国期を代表する流行作家の地位を不動のものにした。1933 年にオランダへ亡命を果たしたが 1934 年にアウシュヴィッツに強制送還されそこで亡くなった。

をみざす労働組合的要素を文筆家団体へと取り入れようとしたのであった。この試みを推進した中心人物は、SDS 設立の原動力でもあったランツベルクであった。彼は、文筆家は被雇用者であるという視点から、労働組合を一つの文筆家団体モデルとして捉え、連盟機関紙『文筆家』（„Der Schriftsteller“）創刊当初から SDS を労働組合的文筆家団体へと変えることを視野に入れた記事を同紙に積極的に掲載する。しかし、ランツベルクの構想は、あまりにも時期尚早であり、会員の賛同を得ることはできなかった。なぜなら、会員の間に、労働組合についての認識がまだ十分に浸透しておらず、さらに、文筆活動の経済面に関する知識や理解が乏しかったからである。この状況を目の当たりにした彼は、経済領域における会員の意識改革を最優先課題としたうえで、SDS を労働組合的組織へ変える試みを徐々に推進していくことを決意する。このような設立当初に沸き起こった組織における労働組合的特質、文筆活動の経済面に関する諸問題を打破し、組織としての一つの理想像として提示して見せたのが、1911年3月に SDS 会員ヴァルター・フレート（Walter Fred, 1879—没年不詳）¹⁴によって刊行された SDS 綱領パンフレット『商品としての文学』（„Literatur als Ware“）であった。



「一瞬のうちに、最も個人的な芸術作品も、衝動的な感性から生まれた文芸作品もまた商品になってしまうのだ」¹⁵という冒頭で始まるフレートの現状認識は、『商品としての文学』全体を貫くものであった。彼は、文芸市場における経済状況、メカニズムに関する極めて現実的な分析を試み、作品の上演による劇場観客動員数、売り上げられた書籍部数、新聞、雑誌定期購読者数という文芸市場がはじきだした具体的な数値に注目する¹⁶。次にこれを基礎資料として、職業的成功を収めた文筆家の例を挙げ、彼らの収入源を分析した上で、長編小説、あるいは戯曲を書くことが、職業的成功へつながると指摘した。そして彼は、この論文の帰結部で、SDS の綱領案を提示する。この中には、まだ組織内に浸透しきいていなかった「労働組合的特性を兼ね備えた組織」、「連盟専用の法律事務所

【図版1】『商品としての文学』表紙 務所の設置」、「連盟業務における協調的、感情的なものの徹底的な排除」¹⁷などが盛り込まれていた。このように、『商品としての文学』は、SDS 設立当初からランツベルク、またはホイスによって繰り返し議論されてきた「文学作品、並びに文筆家の文芸市場における商品価値」、「文筆家の経済的利潤の拡大」、「労働組合的特性」といった問題に正

¹⁴ ジャーナリスト。本名はアルフレート・ヴェクスラー（Alfred Wechsler）、オーストリアのウィーン出身。SDS 設立前に行なわれたカフェでの会合にも頻繁に出席した記録が残っている。1910年に SDS に正式に入会している。

¹⁵ Fred, Walter: Literatur als Ware. Bemerkungen über die Wertung schriftstellerischer Arbeit. Berlin 1911. S. 9.

¹⁶ 真貝恒平：『文学の商業性 —— 1910年頃における文学作品の価値をめぐって ——』独語独文学研究年報 第31号 99～114頁（北海道大学 ドイツ語学・ドイツ文学研究会）。

¹⁷ Fred, Walter: Literatur als Ware. S. 55.

面から取り組み、これまでの綱領に関する議論を収束させ、さらに、当時の文筆家たちが抱えていた「ペンで生活していくにはどうしたらよいか」という深刻な問題に打開策を提示するものであったのである。

フレートの『商品としての文学』は、ただ単に SDS の綱領を提示して見せただけではなく、「文学の商品性」を宣言した論文でもあった。これは、1860～70年代にかけての産業化・工業化によって引き起こされた印刷技術の革新、さらに、この技術革新によって、例えば家庭雑誌『園亭』（„Die Gartenlaube“）¹⁸に代表される比較的安価な出版物の登場、そして、このような出版物の登場による読者層の拡大というように、連鎖反応的に引き起こされた新たな文学状況が背景にあった。この文学状況が、19世紀後半から世紀転換期を経て20世紀初頭まで存続したのである。

綱領パンフレット『商品としての文学』の刊行は、SDS が報酬額、検閲などをめぐって出版社、編集者に対して具体的な行動を起こそうとする、言わば「実践段階」への出発点となったことは言うまでもない。

2. SDSの初期活動（1912—1914）

SDS は、1911年頃から第一次世界大戦直前まで、出版社、編集者に対して文筆家の権利保護のためにさまざまな闘争を挑むこととなる。つまり、文筆家の報酬額、記事の無料販売、著作権をめぐる闘争である。記事採用、報酬支払いをめぐる SDS は、設立からまだ間もない1910～14年初頭にかけて、文筆家と出版社、編集者の間の原稿取引に関するさまざまな確執に積極的に関与していく。その際に SDS は、連盟機関紙『文筆家』やその他の雑誌で、出版社、編集者に対する批判を繰り返し、頻繁に抗議集会を開くことで、この闘争を一部の文筆家による局地的な抗議ではなく、一つの社会運動へと発展させようとしたのである。特に当時の SDS 代表ウルリッヒ・ラウシャー（Ulrich Rauscher, 1884—1930）¹⁹を中心に繰り広げられた、書籍出版社の経済連合である「新ドイツ出版界」（Neue Deutsche Verlagsgesellschaft: 略称 NDV）との原稿の無料利用に反対する闘いは、SDS の組織活動において大きな成果を生み出し、世間にその存在を知らしめる機会となった。この際に確立されたプロパガンダ活動は、今後の SDS による出版社、編集者との雇用条件をめぐる闘争に一つの指針を示すものであった。つまり、今日の「印刷産業組合」（IG Druck und Papier）のような大衆団結を闘争のモデルに据え、文筆業に携わる全ての人々による「闘争共同体」（Kampfgemeinschaft）を形成して賃金値上げを団交するといった、労働組合による賃金闘争の下地がすでにこの頃に敷かれていたのである。

原稿の無料使用をめぐる SDS の闘争は、具体的な打開策を打ち出すという段階にまでは達しなかったが、この闘争によって連盟綱領であるディレクタントの排除を打ち出すようになり、

¹⁸ 出版人エルンスト・カイル（Ernst Keil, 1816—1878）によって1858年に創刊された家庭雑誌。1870年代には中産階級に絶大な人気を誇り、予約購読者数は40万人を越えた。

¹⁹ ジャーナリスト、小説家、劇作家。第一次世界大戦勃発直後に、戦争支持の態度を明確に示した政治パンフレット『戦争と文学』（„Der Krieg und Literatur“）を刊行。1919年には、政府新聞情報局長に就任。1920年には公使としてグルジア、1922年にはワルシャワに駐在する。1913～20年まで SDS 代表を務め、初期 SDS 活動を支えた功労者であった。

SDS 内に浸透させ一致団結の意識を高めることへつながった。つまり、原稿の無料使用をめぐる問題は、SDS が掲げた「職業文筆家のための組織」というスローガンを SDS 内に浸透させる一つの契機となったのである。このような文筆家の権利保護に関して SDS 内の「舵取り」となったのが、SDS 設立メンバーであり、豊富な法律知識を兼ね備えた人物、ザミー・グローネマン (Sammy Gronemann, 1875-1952)²⁰とマルティーン・ベラート (Martin Beradt, 1881-1949)²¹によって設立された SDS 直属の法律専門機関「法律擁護委員会」(Rechtsschutzkommission) であった。SDS は法律擁護委員会を拠点とし、文筆家の法律上の権利を保護するシステムを強化したのである。連盟機関紙『文筆家』によって成された出版社、編集者への働きかけは、成功したものもあれば、そうでないものもあった。しかしこれらの試みは、たとえ失敗に終わっても当時の文筆家に商慣習に対する意識だけではなく、法律に関する知識の必要性を否応でも迫るものであったのである。当初の法律擁護委員会には、積極的に訴訟を起こすという好戦的イメージが常につきまとった。この運営方針は、会員やその他の文筆家に信頼を与えたが、訴訟にかかる多額の出費により、法律擁護委員会は、設立早々、財政面で苦境に立たされることとなった。そこで法律擁護委員会の重点は、文筆家との信頼関係を崩さず、文筆家の法律相談、出版社への仲介役、または出版社、編集者といった文筆家の契約相手との間で起こる法的トラブルを未然に防ぐような打開策を打ち出す、といった方向へと転換されていく。SDS は、この法律擁護委員会を起点に、著作権と出版権、不許複製をめぐる行動を起こしていった。

さらに文筆業の自由を求めて、SDS は「検閲闘争」(Zensurkampf) へと向かうこととなる。検閲に対する抗議運動は、ベルリンでハンス・ヒューアン (Hans Hyan, 1868-1944)²²、ミュンヘンでフランク・ヴェーデキント (Frank Wedekind, 1864-1918) のそれぞれの作品をめぐる SDS 内にとどまらず大規模な運動へと発展したのである。特にヴェーデキントの作品をめぐる SDS ミュンヘン地方支部と検察局の争いは一つの社会運動にまで発展したが、それと同時に、この争いによって当時の SDS 会員トーマス・マン (Thomas Mann, 1875-1955) が脱退するなど SDS 内に波紋を投げかけることとなった²³。結局、この抗議運動は根本的な改革ま

²⁰ ユダヤ教聖職者の息子として生まれ、SDS 設立時はベルリンで弁護士として活動していた。さらに、同時期にベルリンを拠点に展開されたユダヤ復興主義運動の中心人物でもあった。本格的な文筆業は第一次世界大戦後に開始され、1920年に発表したユーモア小説『混乱』(„Towuhabobu“)により文筆家としての名声を得た。1936年にはパレスチナへ亡命し1952年にイスラエルのテル・アビブで亡くなっている。

²¹ テオドーア・ホイスと親交があり、彼を SDS に誘ったというエピソードが残っている。SDS 設立時は28歳のまだ駆け出しの弁護士であった。文筆業では、1908年にフィッシャー社から発表した処女小説『進行』(„Go“)によって注目される。その後も、文筆業の傍ら弁護士としても活動を続ける。1933年にユダヤ系出身であることから弁護士の職を廃業することを余儀なくされ、1939年にアメリカのニューヨークへ亡命した。

²² 小説家、カバレット芸人。SDS 設立メンバーの一人。刑事犯罪学者から小説家へ転身し、多くの犯罪、推理小説を書く。1901年にベルリンでカバレット『銀のボンズ鉢』(„Silberne Punschterrine“)を設立し、ベルリンの下町人情を歌うカバレット芸人として人気を博した。

²³ ミュンヘンで巻き起こったヴェーデキントの作品をめぐる検閲局と文筆家の間の対立、並びに SDS ミュンヘン地方支部、トーマス・マン、フランク・ヴェーデキントの間で交わされた議論の様子は、当時、ミュンヘンでアナキスト、詩人として活動していたエーリッヒ・ミュースァム (Erich Mühsam, 1887-1934) が編集した週刊紙『カイン。人間性のための雑誌』(„Kain, Zeitschrift für Menschlichkeit“) 1913

では至らなかった。しかし、検閲局、あるいは裁判所といった国家の行政、立法機関による文学作品の一方的な差し押さえ、発禁処分に対する抗議運動は、今後の SDS の活動で大きな支柱を成すものであり、この第一次世界大戦前に起こった検閲に対する抗議運動は、SDS の検閲闘争の始まりを告げるものであったのである。

文筆業の育成に関しても SDS は大きな貢献を果たす。ハンス・ランツベルクを中心に設立された「クライスト基金」(Kleist-Stiftung) によって若い劇作家の育成を促進し、さらに小説家のために「フォンターネ賞」(Fontane-Preis) 創設に貢献したのである。この二つの文学賞創設に SDS が貢献した背景には、SDS が貧しい文筆家を無条件に救うのではなく、「ペンで生計を立てる」といった文筆家の自立を目指す考え方があった。したがって、これは文筆業の職業的制度を後押しする SDS の本来の一連の活動と根を同じくしたものであり、つまり、文筆家という曖昧で不安定な存在が(社会的統合化)した形態に落ち着いてゆくにあたっての、一過程を表す取り組みなのである。

設立から第一次世界大戦までの SDS の組織構造を見ると、劇的な変化が起こっていた。SDS は、「ディレクタントの排除」を入会審査でより明確に規定し厳格化させる一方で、職業文筆家だけでなく、組織拡大を狙って「雑誌編集者」(Redakteur) も会員へ取り込んだのである。これは、SDS 執行部の「たとえ出版社との雇用関係をもっている、編集者が自由に出版・文筆活動を展開する点では、我々フリーに活動する職業文筆家と同じ立場にある」²⁴という方針に基づくものであった。これを機に SDS は、職業文筆家だけでなく、文筆業界全体を包含した巨大組織への階段を駆け上がることとなる。また入会の際、志願者の文学的潮流、政治的イデオロギーは、ほとんど考慮されず、組織内においても会員の間でほとんど問題視されることはなかった。その証拠に、SDS 会員の構成は、当時の主な文学的潮流(表現主義、郷土芸術運動、自然主義、新ロマン主義)と政治イデオロギー(左翼寛容主義、国家主義)を描き出した「縮図」であり、これは、SDS が(超党派的組織)であったことを如実に反映している。さらに、SDS 執行部に「業務執行者」(Geschäftsführer) という新たなポストが設けられ、ベルリン中央本部の他にミュンヘン、ライプチヒに「地方支部」が設立され、SDS は組織として大きな変貌を遂げつつあったのである。

SDS の綱領がより明確となり組織が拡大するにつれて、SDS の当時の競合団体との関係が鮮明に浮かび上がってきた。ディレクタントを多く会員に取り込んでいた巨大組織 ASV に対抗すべく、SDS は DSV、「叙情詩人のカルテル」(Kartell lyrischer Autoren: 略称 KLA)²⁵、そして「ドイツ新聞雑誌帝国連盟」(Reichsverband der deutschen Presse: 略称 RDP)²⁶と協力関係

年7月～10月に大々的に報じられている。

²⁴ Der Schriftsteller. Zeitschrift des Schutzverbandes deutscher Schriftsteller. 1913.

²⁵ 1902年にオットー・ユリウス・ビーアバウム(Otto Julius Bierbaum, 1865-1910)、デートレフ・フォン・リーリエンクロン(Detlev von Liliencron, 1844-1909)、フーゴ・フォン・ホフマンスタール(Hugo von Hofmannstahl, 1874-1929)など七名の著名な叙情詩人によって結成されたカルテル。自らの市場での利益を確保するために、出版社と作品の最低価格の設定、複製禁止をめぐる協議を行ない、抒情詩の分野における利益保護団体として革新的な活動を展開した。1933年まで存続。

²⁶ 1910年にベルリンで設立されたジャーナリスト、編集者による利益団体。最低賃金の設定、週休、年休の改善、解約告知期間の改正など労働条件改善を組織目標として労働組合的要素を多分に含み、多くのジ

を築いていった。SDS と ASV の対立関係による軋轢、あるいは SDS と DSV、KIA、RDP の協力関係による均衡は、第一次世界大戦後に新たな局面を迎えることとなる。

このように、設立から第一次世界大戦直前までの出版社、編集者等に対して SDS は実践的な行動を開始していった。その活動はまだ試行錯誤の要素を多分に含んでいたが、この試行過程を通して組織としての活動基盤を練り上げ、発展させていったのである。もちろん、影響力という点ではまだ限界があったが、利害団体として着実に根を張ったのがこの初期の活動期間であると言ってよい。ここで起こされた SDS の文筆家の権利保護を目的とした運動は、第一次世界大戦下という特殊な時代状況で、一時的に活動内容を変えつつも、組織形態を大幅に発展させながら引き続き行われるのである。

3. 第一次世界大戦期の SDS (1914–1918)

—— 戦争プロパガンダ、福祉事業、カルテル ——

この期間、SDS はこれまでの活動とは異なる、一見異質な活動に取り組む。SDS は、第一次世界大戦中に『ドイツ兵士の本』 („Das deutsche Soldatenbuch“) と『SDS の戦争ファイル』 („Kriegsmappe des SDS“) という二冊の小冊子を刊行する。この二冊の小冊子の刊行は、戦争を口実として文筆業の存在意義・重要性を世に宣伝しようとする SDS の戦争プロパガンダを利用した文筆家プロパガンダとも言える一連の活動の流れの始まりであった。つまり、この活動は、第一次世界大戦中に広く行われた文筆業による組織的な「戦争プロパガンダ」の一端を担うものであったとともに、その背後には、当時の文筆業に携わる人々、あるいは SDS による〈社会へ向けて文筆業の存在価値をアピールする〉といった思惑が隠されていたのである²⁷。

SDS が戦争プロパガンダ機関へと転換を果たすきっかけとなったのが、戦争勃発直後に当時の代表ウルリッヒ・ラウシャーによって刊行された政治パンフレット『戦争と文学』 („Der Krieg und Literatur“) である。ラウシャーは、このパンフレットで戦争支持の態度を表明し、戦時下での文筆家の社会における意義と使命の重要性を強調する²⁸。つまり、「文学」による戦争参加を宣言したのであった。

ラウシャーの理想・国家主義的態度への方向転換は、第一次世界大戦によるドイツ全体の「精神的高揚」、さらには「ドイツ社会民主党 (Sozialdemokratische Partei Deutschlands: 略称 SPD) の戦争賛成」、「労働組合活動の休止」といった変化と同様であった。つまり、社会におけるさまざまな組織が、SDS と同様に戦争という非合理的な状況・事態への介入により、全ドイツ国民の意思統一へと向かったのである。ラウシャー主導の「戦争支援」、「戦争賛美」は、彼が代表を務める SDS にも大きな影響を及ぼし、やがて SDS は、これまでの文筆業の利益代表から、ドイツ民族のアイデンティティを形成し、一丸となって戦争へと参加する機関へと一時

ジャーナリストを組織に取り込んでいたことから SDS とは設立当初から良好な関係を築き、ワイマール共和国期には SDS の専門組織とカルテル協定を結び、事実上、1930 年に SDS へ吸収合併された。

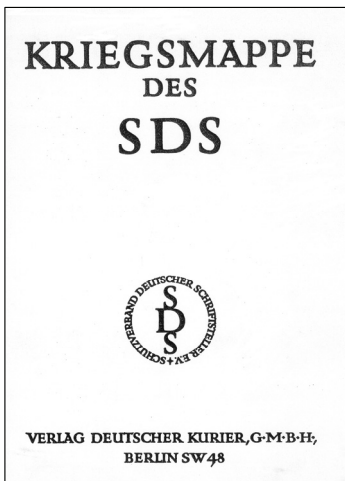
²⁷ 真貝恒平:『文筆家による組織的な戦争プロパガンダ —— 第一次世界大戦における「ドイツ文筆家保護連盟」の活動から ——』 独語独文学研究年報 第 32 号 16～35 頁。

²⁸ Vgl. Rauscher, Ulrich: Der Krieg und Literatur. München und Berlin. 1914.



【図版2】『ドイツ兵士の本』表紙

で、それまでの精神的高揚は根底から揺らぎ、戦争を触媒とした文筆家の知的指導者としてのアピールは、急速に終息へと向かったのである。そのちょうど過渡期に刊行されたのが『SDSの戦争ファイル』であった。この小冊子は、『ドイツ兵士の本』で謳われていた民族性、あるいはそれを連想させるような牧歌性は影を潜め、執筆者各々の個人的な戦争に対する態度表明であり、冊子としての統一性に欠けたものであった³⁰。



【図版3】『SDSの戦争ファイル』表紙

なる。

第一次世界大戦の熱狂と興奮から徐々に醒めていった SDS は、1917 年頃から『ドイツ兵士の本』の是非をめぐる議論によって、文筆業の戦争プロパガンダ機関から政治的中立性を保持した

的にその様相を変化させる。この姿勢が最も端的に現われたのが、1914 年末に SDS によって編集・刊行された『ドイツ兵士の本』であったのである。国民的高揚が覚めやらぬ 1914 年末に刊行された『ドイツ兵士の本』には、民族性、郷土性を扱った詩、短編小説、逸話といった文学ジャンルの他に、軍事報告、旅行記、さらには、例えばフリードリッヒ大王 (Friedrich der Große, 1712-1786)、フィヒテ (Johann Gottlieb Fichte, 1762-1814)、ビスマルク (Otto von Bismark, 1815-1898) といった過去の偉人たちによる格言集が盛り込まれ、積極的な「戦争支援」、「戦争賛美」という一貫したテーマが流れていた²⁹。

しかし、戦地の悲劇的現状、血生臭い陣地戦による戦争犠牲者の増加といった戦争の悲惨さがますます浮き彫りとなること

第一次世界大戦における SDS の戦争を口実とした「文筆業の社会へのアピール」を視野に入れた『ドイツ兵士の本』と『SDS の戦争ファイル』の刊行は、時代背景、刊行の経緯は全く相反するものであったが、1911 年に SDS が綱領パンフレットとして刊行した『商品としての文学』で問題となった「どうしたら文筆業を営むことができるか？」というテーマに根底で通じるものであった。つまり、第一次世界大戦中に行われた二冊の小冊子の刊行は、「特殊な状況下」で行われた SDS の綱領に即した文筆家の〈社会的に統合化〉した文筆業の姿を社会全体に印象付けるという意味で社会と文筆業の関係再編を図ってきた SDS の取り組みの延長上にあるものと解釈できる。この試みは、第一次世界大戦終結後、ドイツ革命、ワイマール共和国へと引き継がれていくことに

²⁹ Das deutsche Soldatenbuch, herausgegeben vom Schutzverband Deutscher Schriftsteller. (Schriftleitung Robert Breuer, Hans Landsberg, Ulrich Rauscher) Berlin 1914.

³⁰ Kriegsmappe des SDS, herausgegeben vom Schutzverband deutscher Schriftsteller e. V., Berlin, Verlag Deutscher Kurier, o. J. (1916) .

利益代表機関への「帰還」を徐々に進めていく。「利益代表機関としての組織づくりを望むのであれば、政治的関連性を経済領域から断固として排除することが前提条件である」³¹ということ、を、SDSは、1917年に行われた通常総会で、会員のクルト・ヒラー（Kurt Hiller, 1885-1972）³²が中心となって巻き起こした議論の末、再確認することとなった。したがって、職業団体の「政治化」は、必然的に他の団体、あるいは社会全体からの孤立を招き、政治的陣営への依存は、職業団体をイデオロギーに従属させるだけでなく、組織のあらゆる綱領実践を困難にさせる、という危険性を孕んでいたのである。結成当初から非政治的態度を貫くことを心掛けてきた SDS は、第一次世界大戦による熱狂と冒険、それに対する自己批判の後、再び政治的中立性への回帰を決意したのであった。

SDS が戦争の熱狂から完全に解き放たれた転回点となったのが、1918年にある政治雑誌に掲載された SDS 会員エドガー・シュタイガー（Edgar Steiger, 1858-1919）³³の『文筆家の貧窮』（„Schriftstellerelend“）という記事であった。第一次世界大戦における文筆業は、いわゆる「戦争文学」と呼ばれるジャンルの書籍が一時的に爆発的な売れ行きを示したが、その好景気は、戦争での敗色が濃厚になるにつれて急激に減退し、文筆家の経済的苦境を打開させる突破口とはならなかった。多くの刊行物が戦時下における兵士等のための図書供出のために捧げられるほど、ますます文筆活動は国家的義務を果たすものへと移り変わり、文筆業の経済面の問題は省みられなくなっていた。シュタイガーは、このような文筆業の現状を考慮して、SDS に対し叱咤激励の意味を込めて、文筆業の衰退を食い止める打開策を講じることを訴えたのである³⁴。このような状況下で、SDS が戦争勃発時から水面下で計画し、小規模ではあったが着実に実施してきたのが、貧窮に喘ぐ文筆家の救済処置である「社会福祉事業」であった。

1916年頃から第一次世界大戦によってますます貧窮に苦しむ文筆家の救済を目的として、本格的に始動した SDS の社会福祉事業は、会員への金銭的補助や住居の斡旋など経済面を支えることとなった。SDS 独自の「共済金庫」が設立され、当時の著名な SDS 会員は、自らの作品の売り上げや劇の上演による報酬の一部を SDS に寄付した。戦中に確立した社会福祉事業は、今後の SDS の組織活動における重要な部分を占め、文筆家の経済状況を救う打開策として大きな役割を果たすこととなる。

第一次世界大戦前にミュンヘンを拠点に積極的に行われた SDS の検閲闘争は、戦争勃発から数年の間、一時停止状態であったが、戦争の熱狂から覚め始めた 1916 年末頃から SDS ベルリン本部を中心に徐々に盛り上がってくる。1917年5月に、SDS 主催によって開かれた他団体との会議の焦点は、「舞台文筆家の経済的困窮の打破」であった。この難題を解決する方法として

³¹ Der Schriftsteller. Zeitschrift des Schutzverbandes deutscher Schriftsteller. 1917. S. 25.

³² ジャーナリスト。1903年にベルリン大学で法律学、哲学の博士号を取得。以後、ベルリンでジャーナリストとして活動し、雑誌『パン』（„Pan“）、『行動』（„Die Aktion“）、『世界舞台』（„Die Weltbühne“）といった多くの雑誌の編集を手掛けた。その言動は、当時の政治界、文学界の垣根を越え、大きな影響力をもっていた。

³³ 政治批評家、抒情詩人、小説家。世紀転換期頃からミュンヘンを拠点に文芸・政治批評家として活動する。1889年に文芸批評『新しい文芸をめぐる闘い』（„Der Kampf um neue Dichtung“）を刊行。

³⁴ Vgl. Steiger, Edgar: Schriftstellerelend. In: Die Neue Zeit. Wochenschrift der Deutschen Sozialdemokratie, 36. Jg., Nr. 23 v. 6. September 1918, S. 529-535.

掲げたのが、「検閲の有害性」と「外国作品の抑制と若い世代の促進」である³⁵。この会議の後、SDS は、『ドイツ兵士の本』、『SDS の戦争ファイル』とは全くコンセプトの違う、第一次世界大戦中に刊行された刊行物では三冊目となる『ドイツの劇場の未来』(„Die Zukunft der deutschen Bühnen“)を出版する。この小冊子は、戦争プロパガンダの要素を色濃く持った先の二冊の刊行物とは異なり、SDS が、戦争の呪縛から解き放たれ、再び本来の綱領である文筆業の利益代表機関としての性格を前面に押し出し、これを組織活動の重点に据えることを宣言した書であった。

第一次世界大戦中から戦後にかけて、SDS といくつかの文筆家組織の間には新たな劇的な変化が訪れた。ASV や「ワイマール文筆家同盟」(Weimarer Schriftsteller-Bund: 略称 WSB)³⁶のように、SDS と真っ向から対立する組織もあれば、RDP や DSV のように、かつてのような協力関係を SDS と結ばない方針を執る組織もあり、さらに KIA のように、これまでよりもいっそう SDS との関係を強める組織もあった。SDS は、1918 年 5 月から KIA、DSV と、統一行動を前提とした利害連合「カルテル」(Kartell)への協議に入ったが、その直後の国内の動乱によりこの計画が雲散霧消と化してしまった。ただし、カルテル形成による SDS の他団体との連携活動は、ドイツ革命以降、ますます重要な意味を持つようになる。

実際、SDS は、ワイマール共和国期に入ると、自らの組織綱領に同調を示す団体と業務提携、吸収合併を繰り返して組織の拡大を図る。やがて、これらの試みは、自らの団体の組織拡大という目的だけではなく、政府を後ろ盾としたドイツ文筆業全体の統一という目標へと発展していく。したがって、革命前夜に行なわれた SDS のカルテル形成は、その後のドイツ文筆業界の統合へ向けた試みの萌芽であったと言えよう。

4. SDS の変革期 (1918-1920) —— 文筆家労働組合の誕生 ——

1918 年に起こった 11 月革命は、これまでの政治・社会全体の枠組みを突如として崩壊させ、ドイツの文筆業界にも大きな影響を及ぼした。革命を機に文筆家の中には、これまでの経済的・社会的苦境を打破すべく、自らの存在価値を社会へ向けてアピールする者が現われ始めた。その代表格であったのが、1921 年に SDS 代表に就任することとなるベルンハルト・ケラーマン (Bernhard Kellermann, 1879-1951)³⁷であった。彼が革命直後に発表した『文筆家と国家』

³⁵ Vgl. Die Zukunft der deutschen Bühne. Fünf Vorträge und eine Umfrage, herausgegeben vom Schutzverband deutscher Schriftsteller gemeinsam mit dem Goethe-Bund, dem Verband deutscher Bühnenschriftsteller, der Vereinigung künstlerischer Bühnenvorstände und der Gesellschaft für Theatergeschichte. Berlin Oesterheld & Co., 1917.

³⁶ 1916 年にジャーナリストであるフランツ・フォン・デア・グロート (Franz von der Groth, 1885-没年不詳) によって設立された団体。利益団体というよりも、新たな文学賞創設へ向けた資金援助や定期朗読会を開くなど文学愛好家団体の性格が強かった。文学の商業性を重視する SDS とは組織綱領の面から真っ向から対立した。

³⁷ 小説家。1904 年から小説を書き始め、「新ロマン主義」と「印象主義」に影響を受けたが、1913 年に刊行した社会批判・ユートピア小説『トンネル』(„Der Tunnel“)で新境地を開く。『トンネル』の商業的成功により、当時の流行作家の階段を一気に駆け上がった。第一次世界大戦では熱狂的な戦争支持者にまわったが、その後、平和主義者に転向を果たし、社会主義に傾倒する。1920 年にはドイツ革命を題材にした革命小説『11 月 9 日』(„Der 9. November“)を刊行し、当時の文筆業界にセンセーションを巻き起こした。

(„Der Schriftsteller und Republik“³⁸) で主張したのは、ドイツ文筆家のこれまでの社会的・経済的な「アウトサイダー」(Außenseiter) の立場を克服し、ドイツ文筆家の存在を再度、新しい国家に認めさせることであった³⁸。旧体制下の国家では、社会に対する地位向上のための数々の試みが、具体的成果をもたらすことなく終わったドイツの文筆家は、戦後から革命を経て共和国を樹立するまでの間にかけて、〈社会的統合化〉の新たな段階に入った。

SDS の 11 月革命以降の急速な組織発展は、二つの大きな運動によって実現された。それは、革命期の「レーテ運動」(Rätebewegung) と、レーテ運動の衰退と共に最高潮の盛り上がりを見せた「労働組合運動」である。革命勃発によって全国に大きな広がりを見せた「レーテ運動」によって、1918 年 11 月～12 月にかけて、全国で自発的に実施された地方選挙から「労・兵士レーテ」(Rat der Arbeiter- und Soldatenräte) が生まれた。「議会民主制とは別に労働者および兵士の独立した代表機関を設置する」ことを掲げたレーテの思想は、ドイツ革命直後に大きな広がりを見せ、文筆家もまたこの政治的大転換に介入していったのである。1918 年 11 月 10 日、ベルリンで行われたレーテ集会の折に「労・兵士レーテ」と結びついて「知的労働者レーテ」(Rat geistiger Arbeiter) が設立されたのを皮切りに、ドイツの各都市においても似たような組織が形成された。特にミュンヘンで設立された「知的労働者レーテ」は、ハインリッヒ・マン(Heinrich Mann, 1871-1950) が中心となって、SDS ミュンヘン地方支部とクルト・アイスナー(Kurt Eisner, 1867-1919)³⁹率いる「ミュンヘン・レーテ共和国」(Räterepublik München) の連携によって組織として勢力を拡大していったのである。結局、「労・兵士レーテ」は、1918 年 12 月にベルリンで開かれた「労・兵士レーテ全国大会」で国民議会選挙実施の方針が採択され、さらに翌 19 年 1 月の「ベルリン蜂起」で左翼急進派が弾圧されるなどしたため、革命勃発から僅か半年で消滅した。

こうした文筆家たちの一連の政治化の流れの中で、SDS もまたこの歴史動向に乗り、新しいより社会的に保障された安定的な立場を得ようと動き出す。SDS のレーテ運動への接近は、当時の SDS 代表と業務執行者であったウルリッヒ・ラウシャー、ローベルト・ブロイアーが、政府情報局で活動していたことによって生まれた。SDS は、革命政府の後ろ盾を得て、まずミュンヘンを拠点に展開された「知的労働者レーテ」の設立に関わり、「経済の社会化」へ向けた試みの一環として、「労働評議員」(Arbeitsrat) による出版社の運営への介入を掲げ、出版者との攻防戦を繰り広げたのである。このように、文筆家が「労・兵士レーテ」の労働者側へ歩み寄りを示したことは、文筆家の社会史において注目すべき一つの「事件」であった。

さて、短命に終わったレーテ運動であったが、それに替わってその後大きな高まりを見せたのが労働組合運動であった。1919～20 年までの SDS の活動は、連盟機関紙『文筆家』が現存し

³⁸ Kellermann, Bernhard: Der Schriftsteller und die Republik. In: Deutscher Revolutionsalmanach für das Jahr 1919. hrsg. v. Ernst Drahn und Ernst Friedegg, Hamburg/Berlin 1919. S. 114.

³⁹ ジャーナリスト。ユダヤ系の繊維工場主の息子に生まれ、ベルリン大学で哲学を学んだ後、1892 年から『フランクフルト新聞』(„Frankfurter Zeitung“)に文学、政治批評記事を掲載する。1917 年には「独立社会民主党」(Unabhängige Sozial-demokratische Partei Deutschlands: USPD) 議長に就任し、1918 年には革命直後に建設された「自由国家・バイエルン」(Freistaat Bayern) の初代表に就任。その後、政府による革命運動の鎮圧により、1919 年に暗殺された。

ていないため、ほとんど明らかとされてはいないが、当時のいくつかの文芸雑誌で1919年3月頃からSDSの労働組合への組織転換をめぐる議論が白熱化してくる。革命によって時代を動かす主役に躍り出たのが「労働者」(Arbeiter)であったように、SDSも、文筆業を生業とする「知的労働者」(Geistige Arbeiter)組織であるという自己規定を鮮明にし、労働者を基盤とした組織、すなわち労働組合へと生まれ変わろうとしていたのであった。

自由労働組合会員数が過去最高を記録した1920年の5月30日に、SDSは、その団体名に新たに「ドイツ文筆家労働組合」という名称を加え、これまでの文筆家の利益団体から労働組合へと組織転換することに踏み切った。これにより、SDSはドイツの文筆家団体史上初めて「文筆家労働組合」を自称する組織となり、以来、組織名「ドイツ文筆家保護連盟」(Gewerkschaft deutscher Schriftsteller)の側には常に「労働組合」と明記することが義務づけられたのである⁴⁰。

SDSが労働組合組織として掲げた「団体での賃金協約締結」、「社会保険契約」、「事業協議委員会による代理交渉」は、まさに近代的な産業労働組合の目標設定であり、文筆家労働組合の黎明であった。また、出版社に雇用された編集者や記者だけではなく、特定の雇用関係を持たない文筆家も労働者として同格に位置付けると宣言された。賃金協約の締結は、文筆業の利益代表機関としての支柱を成すものであり、これを労働法の社会保護規則に組み入れたことは、まさにSDSが設立以来持ち続けていた文筆家は被雇用者であるという認識が出発点となっている。SDSの労働組合への組織転換は、当時の社会・政治・経済の動向と合致し、まさに時代の雰囲気をつかんだものであった。

労働組合へ組織転換した後もSDSは着実に会員数を増やしている。労働組合に組織転換したSDSではあったが、左翼運動家への接近、SPDに代表される政治勢力との関係の強化などを経ながらも、イデオロギー的に立場を狭めることなく、むしろ文筆業界全体を代表する組織へと組織を拡大させていったのである。当時の世論にSDSに対する対抗姿勢を強く表明した代表的な文筆家団体は、WSBとDSVであった。特に、これまでSDSと目立った対立関係になかったDSVは、国家主義的・民族主義的文筆家を多く取り込み、政治的イデオロギーを強く前面に押し出すことによってSDSに対抗しようとした。しかし、SDSは、DSVやWSBが繰り広げたイデオロギーや政治性に関する辛辣な批判を跳ね返し、結果、保守的文筆家さえも会員に取り込み、ドイツの文筆業界全体の超党派的組織として発展しつつあったのである。

11月革命、レーテ運動の高まりと衰退、そして労働組合の発展と1918年11月～1919年5月までの約半年間でドイツ国内の政治・経済・社会状況はめまぐるしく変化し、このような時代の渦が、SDSの活動形態にも大きな影響を及ぼしたのであった。まさにSDSは、革命の嵐が吹きすさぶ中、組織として大きな変革期を迎えたのである。その集大成とも言うべき出来事が、1920年の労働組合への組織転換だったのである。ただし、SDSが労働組合への組織転換を果たすことができたのは、時勢がその追い風となっただけではない。文筆家団体史上初となる労働組合SDSの誕生には、それなりの布石があった。SDSは、設立以来、文筆家団体として労働組合

⁴⁰ Fischer, Ernst: Der Schutzverband deutscher Schriftsteller. S. 234.

への組織転換を常に組織内で議論し、その可能性を模索し続けてきたのである。つまり、SDS設立の発端となったベルリンのカフェで夜通し行われた文筆家たちの会合、あるいはSDS設立後に常に会員の間で繰り返し議論されてきた「文筆家の社会的向上と経済的苦境の改善」という当時を生き抜く文筆家たちの目的意識、あるいは文筆活動は「職業」、それとも「天職」か、さらには、文学作品は「商品」、それとも「創造物」か、という「文筆家の存在価値をめぐる議論」が、約十年の間に洗練され、脈々と受け継がれてきたのである。したがって、「社会の中で活動する存在」であろうとする文筆家たちの願いやそれに向けた試みが結実したのが、1920年のSDSの労働組合への組織転換であったと言えるだろう。

5. ワイマール共和国におけるSDSの組織活動（1918—1933）

—— 現代の文筆業代表機関の原型 ——

ワイマール共和国期にSDSが展開した活動は主に、社会全体の未曾有の不況状態における文筆家の経済状況の悪化の打開のために、国家による経済・社会的保護の主張、最低賃金の確立を目指した労働組合に根ざした組織活動、新しいメディアによる文化の大衆化に順応しようとする試み、検閲法制定に対する抗議運動の三つにまとめることができる。

まず、これらの活動を支えた組織基盤の重要な変化について触れておこう。その変化とは、会員の増大による確固とした組織基盤と全国に広がるネットワークであった。1924年には会員数が2,000名の大台に達し、SDSはドイツの文筆家団体の中で最大会員数を誇り、自他共に認める巨大組織へと発展を遂げたのである。そして、この組織拡大の背後では、SDSの方針にいくつかの変化が生まれていた。1927年のSDS通常総会では、19の国内外地方支部と、さらに14の「管区」(Gau)の存在が確認されている⁴¹。地方支部・管区は、その地域独自の法律擁護委員会によって起こした裁判から得た勝訴金をもとに共済金庫を設立し、会員から徴収した労働組合費（労働組合に転換する前の会費にあたる）、寄付金をもとに、地方独自の経営方針を打ち立てたのであった。このように、ベルリンの中央本部と国内外に点在する地方組織との巨大なネットワークが築かれ、地方組織は、中央との連携を保ちながらも、その地区独自の代表機関といった触れ込みで、地域密着性をうたうことにより会員の獲得に乗り出し、その勢力範囲を広げること成功したのであった⁴²。

地方支部と並び、SDSのネットワークをさらに強固にしたのが、「専門組織」の形成であった。1922年に、SDS内に五つの専門組織が設立される。この組織とは、「小説家同盟」(Bund der Erzähler: 略称 BdE)、「叙情詩人同盟」(Bund der Lyriker)、「技術・学術著作家グループ」(Gruppe der Technischen-wissenschaftlichen Autoren)、「芸術批評家連盟」(Verband der Kunstkritiker)、そして「エッセイストカルテル」(Essayistenkartell)である。さらに1928年には、「ドイツ翻訳家連盟」(Bund Deutscher Übersetzer)が設立され、1929年には「新聞雑誌寄稿者連盟」(Verband der Pressemitarbeiter: 略称 VdP)、1930年には、SDSの新しい

⁴¹ Der Schriftsteller. Zeitschrift des Schutzverbandes deutscher Schriftsteller. 1927.

⁴² Fischer, Ernst: Der Schutzverband deutscher Schriftsteller. S. 277.

メディアへの取り組みの活動拠点となる「ラジオ・映画専門グループ」(Radio- und Filmgruppe)がそれぞれ設立されている。これらの専門組織の設立は、ワイマール共和国期における SDS の組織活動、具体的には団体間の統合、あるいは、文筆業とラジオ、映画といったメディアとの利益問題の解決において大きな役割を担うこととなった。

ワイマール共和国期における文筆家団体全般について言えることは、組織拡大の足掛かりとするために、文筆家団体間の吸収合併、業務提携が積極的に行なわれたことである。その中でも特に SDS は、組織内に新たに設立された専門グループと他団体との統合、吸収合併、業務提携を前提としたカルテル協定を積極的に行なっていた。実際、ジャーナリスト・編集者による代表団体であった RDP が、SDS によって新たに設立された専門家グループ VdP と 1930 年 2 月にカルテル契約を結び、実質上の協力体制を築き、また、SDS の専門グループ「叙情詩人同盟」は、これまでドイツで活動する叙情詩人の利益代表として長きに亘ってその覇権を握ってきた KIA を 1932 年 2 月について吸収合併することに成功したのである。さらに、SDS がドイツ革命前夜に描いていた壮大な構想「政府を後ろ盾としたドイツ文筆業の統合」が、1927 年に SDS 主導によって結成された「ドイツ著作物帝国連盟」(Reichsverband des deutschen Schrifttums)で実現されることとなる。この組織は、間もなく加盟団体による内部分裂により実践活動をほとんど展開することはできなかったが、その後のドイツ文筆家たちに一つの組織形態のモデルを示した。

SDS のワイマール共和国期における「文筆家の社会的立場の向上」への試みを決定づけたのが、1921 年に当時、SDS 書記を務めていたアルフレート・デープリン (Alfred Döblin, 1878–1957) による講演『文筆家と国家』 („Schriftsteller und Staat“⁴⁴) であった。デープリンが SDS の組織目標として位置づけた「文筆家の社会的立場の向上」は、1918 年の革命直後にベルンハルト・ケラーマンによって書かれた『文筆家と共和国』を継承するものであったと言える。ケラーマンは、文筆家が「アナーキスト」から「指導者」へと生まれ変わらなければならない⁴³、ということを主張した。デープリンは、彼の主張を受け継ぎつつも、より現実的な視点で文筆家の社会的、経済的貧窮を分析し、国家を軸とした文筆家の社会的立場の向上を目指したのであった⁴⁴。ワイマール共和国末期になると、SDS 内で、執行部とその反対勢力による内紛が絶えず起こることとなるが、そのような混乱の中でも SDS は、組織の解体に至るまで一貫して国家と文筆家の協力関係を築く姿勢をとり続けたのである。

文筆家団体史上初の「労働組合」へと組織転換を果たした SDS ではあったが、文筆家に降りかかった経済不況を打破するために、「最低賃金協約の確立」、「労働条件の向上」といった労働闘争を果敢に行っていくことを新たに組織綱領に加えるが⁴⁵、実際には、一般的な労働運動のようにストライキやサボタージュが計画されるということはなかった。その労働闘争はかなり控え目であったと言える。こうした姿勢はワイマール共和国期を通じて最後まで変わることはなかつ

⁴³ Vgl. Kellermann, Bernhard: Der Schriftsteller und die Republik.

⁴⁴ Vgl. Döblin, Alfred: Staat und Schriftsteller. Berlin 1921.

⁴⁵ Vgl. Rauecker, Bruno: Die Fachvereine der deutschen Schriftsteller. S. 187. In: Die geistigen Arbeiter. 1. Teil. Freies Schriftstellertum und Literaturverlag. S. 157–198.

た。1920年に行われた文筆家による初の出版社側との賃金闘争⁴⁶では、SDSは、競合団体ASVのイニシアチブによって結成された「賃金闘争者同盟」(Bund der Tarifikämpfer: 略称 BdT)に先を越され、その後の賃金闘争では、ASVとの団体間の対立ばかりが目立ち、肝心の労働闘争に集中する体制を整えることができなかったのである。

ワイマール共和国期における文筆家の経済状況は、依然として書籍出版社、新聞社の活動に大きく依存していたのであった。第一次世界大戦終結から1923年までの慢性的インフレーションの数年間における書籍出版社と文筆家団体の間を支配する雰囲気は、一触即発の危機を孕んだものであった。その大きな原因となったのは、出版社による文筆家への経済的圧迫であった。当然、文筆家の間では出版社に対する不満と憤りが噴出する。これを受けて、1922年中頃からSDSは、出版社を徹底的に非難する姿勢をとり始めることとなる。

しかし、インフレーション期にますます激しくなった書籍出版社と文筆家との利害対立は、その後の1924年初頭から、これまでの敵対関係から徐々に友好・協調路線へと転換を図る動きが生まれ、両者の関係は新局面を迎えることとなる。SDSによって推進され、文筆家と出版社の間で取り交わされる雇用条件に関する問題を解決する「仲裁裁判所」(Schiedsgericht)設置へ向けた運動は、1924年2月17日に開かれたSDS通常総会で大きな進展を見ることとなった。当時のSDS代表カール・ブルケ(Carl Bulcke, 1875-1936)⁴⁷は、総会の席上で、帝国法務省の立会いの下で開かれた「出版人協会」(Vereinigung der Verleger)との共同代表者会議で仲裁裁判所に関する規約案を近いうちに提出するように依頼された、と述べたのである⁴⁸。

1924年12月、ついに設立されることとなった「出版人協会」とSDS、「ドイツ小説家連盟」(Verband Deutscher Erzähler: 略称 VDE)⁴⁹による常設の仲裁裁判所は、これまでの文筆家と出版人の対立関係から協調・和解へ向かわせるといった歴史的意義を持っていた。仲裁裁判所は、SDSが解体した後も活動を続け、1935年まで存続する。1927年以降は、その活動の幅はかなり狭められたが、年間平均80以上の訴訟をこなし、特に1931年3月~12月の間では106の訴訟を担当している⁵⁰。仲裁裁判所の活動は、確かに文筆家の出版人との契約内容の全体的な改善には至らなかったものの、文筆家と書籍出版社の関係の安定化において重要な役目を担い、ワイマール共和国期における両者の和解を示した象徴的存在であったのである。

さて、次に出版以外の新しいメディアとSDSとの関係を見てゆこう。ワイマール共和国期に花開いた新たな文化媒体であるラジオの登場は、当時の文筆家の活躍の場を広げる大きな可能性

⁴⁶ 1920年2月28日、SDSの競合団体であるWSBの機関紙『文筆家新聞』(„Schriftsteller-Zeitung“)に、ジャーナリストであるラインホルト・アイヒャッカー(Reinhold Eichacker, 1886-1931)が『文筆家のための賃金協約を!』(„Tarifverträge für Schriftsteller!“)という記事を掲載したことを機に、WSB、ASVを中心に文筆家と出版社の間で賃金協定へ向けた協議が行なわれた。

⁴⁷ 弁護士、ジャーナリスト。商人の息子に生まれ、ベルリンとキールの大学で法学を学ぶ。その後、ベルリンで弁護士として働き、1911年にSDSに加入。1916年には帝国内務省に入り、1920年にその下部組織である映画検閲機関「政府上級映画検査所」(Film-Oberprüfstelle)の責任者に就任している。

⁴⁸ Der Schriftsteller. Zeitschrift des Schutzverbandes deutscher Schriftsteller. 1924.

⁴⁹ 1921年に設立された小説家による利益団体。1922年に設立された専門組織BdEは、この組織に対抗する目的で設立された。設立後しばらくはSDSと対立関係が続いたが、出版社との「仲裁裁判所」の設立へ向けて協力したことを機にしだいに協力関係を築いていく。1932年にはSDSとカルテル協約を結んだ。

⁵⁰ Der Schriftsteller. Zeitschrift des Schutzverbandes deutscher Schriftsteller. 1931.

を秘めていた。1924年の開局当初、ラジオ放送局は、その番組編成で文学テキストに大きく依存していた。そして、放送局は、その作品の著作家に許可を得ることなく利用していたのである。したがって、放送で使用した文筆家の著作権や報酬など、ラジオ放送局は全く考慮していなかった。SDSは、ラジオ開局当初から、「著作権によって、ラジオ放送は文筆家に許可なく作品を放送に使用してはならず、報酬を支払う権利（Recht）がある」⁵¹と主張するが、依然として放送局は文学作品を著作家の許可なしに放送し続け、文筆家へ報酬を支払うことはなかった。これにより、SDSのみならず他の文筆家団体並びに文筆家の間で、著作家の放送使用料による報酬要求はさらに激しさを増すこととなる。そこで文筆家たちにとっては、放送局と著作家の両者によって組織された番組編成の確立、および、放送局から作家側への作品使用に伴う報酬の受け渡しの二点の問題が喫緊の課題となったのである。SDSを含めた文筆家団体は、放送局と文筆家によって連結された組織の設立へ本格的に動き出すこととなる。

1926年6月、「放送権協会」（Gesellschaft für Senderrechte: 略称GfS）が設立された。ただし、GfSの設立にはSDSが参加することはなかった。十分な準備段階を踏まずに設立されたGfSは、設立からすぐに活動はおろか、その存続すら危ぶまれる危機に陥ってしまったのである。GfSの本格的な活動は、約二年後の1929年まで待たなければならない。その発端となったのが、SDSの競合団体であるASVによって引き起こされた著作権訴訟であった。ASVとGfSの対立が表面化したのを契機に、SDSは本格的にGfSの運営に関わっていくこととなる。

SDSの参加により活動の幅を一気に広げることとなったGfSは、政府の承認を得て、早速、ラジオ放送局との賃金契約へ向けた協議へ入ることとなる。1930年2月、個々のラジオ放送局は、個別の著作家の作品を朗読などの放送手段により、週につき15,000行以上放送で流した場合、その作品の著作権を保持する作者、あるいはその作者が亡くなっている場合にはその相続人が出版人とGfSが掲げた利益配当に基づく賃金契約を結ぶことが義務づけられたのである。1931年には、GfSの会員数は5,000名に達し、SDSは、その前年に設立した自らの専門組織「ラジオ・映画専門グループ」を中心にGfSで主導的役割を担い、ラジオ放送局の上部団体である「ドイツ放送協会」（Reichs-Rundfunk-Gesellschaft: 略称RRG）と共に、小説、叙情詩がラジオ放送で使用される際の賃金契約の仲介役を果たしたのであった。

ラジオの登場と並んで、ワイマール共和国期にマス・メディアとして大きな変貌を遂げたのが映画であった。ドイツの映画産業は、19世紀後半に産声を上げ、ワイマール共和国期に全盛期を迎えることとなる。映画館の数は、1918年の2,300館から1930年には5,000館を超えるに至った。1920年代後半になると、ドイツはヨーロッパで最も映画館の多い国となり、製作映画数もワイマール共和国期を通じてヨーロッパ諸国で製作された映画を合わせた数よりも多くの映画がドイツで製作されたのである⁵²。この映画業界の発展は、映画制作会社から映画化に適していると判断された文学作品を書いた原作者である文筆家にとって、新たな「販路」が生まれたことを意味していた。

⁵¹ Wolff, Hans Erich: Rundfunk und Schriftsteller. Im „Der Schriftsteller“ 1925. S. 7.

⁵² ベイトソン、グレゴリー：『大衆プロパガンダ映画の誕生』 御茶の水書房 1986年 214～215頁。

1919年4月、「ドイツ映画著作家連盟」(Verband Deutscher Film Autoren: 略称 VDF) がベルリンで結成される。VDF は、映画上映権販売会社を設立し、映画における文筆業の利益を独占化する傾向を強めていった。この VDF の利益独占化に対し反旗を翻したのが、SDS の当時の業務執行責任者ハンス・カイザー (Hans Kyser, 1882-1940)⁵³であった。カイザーは、VDF の映画上映権販売会社の運営を「自らの営利目的のみのために、文筆業の共有財産を悪用し、ドイツ文筆業における裏切り行為」⁵⁴と激しく批判し、VDF の私的企業による映画業界における利益独占的営業形態に歯止めをかけようとしたのである。しかし、このようなカイザーの抗議運動は、当時の文筆家の映画に対する無関心から大きな運動へ発展することはなかった。まだ、文筆家の間で「報酬が期待できる新たな販路としての映画」⁵⁵という意識が定着していなかったのである。文筆家の間で映画に対する考え方に劇的な変化が見られたのは、1929年に登場した「トーキー映画」(Tonfilm) からであった。これまでの「無声映画」(Stummfilm) 時代とは打って変わり、トーキー映画の登場は、原作、映画シナリオの映画製作における重要度に劇的な変化をもたらされ、作品の原作者である文筆家の映画製作への貢献度は無声映画の時と比べて劇的に増したのであった。

1931年初頭、SDS がこれまで試みてきた映画領域における権利追求は、大きな転換点を迎える。SDS 主導の下、映画上映権保護を目的とした映画著作権団体「映画上映権協会」(Gesellschaft für Filmaufführungsrechte: 略称 Gefa) が設立されたのである。さらに 1932年には、映画への文筆家の著作権行使をより強く主張するために、Gefa といくつかの映画会社による「映画委員会」(Filmkommission) が SDS の従属機関として設立される。この委員会には、当時、SDS ブランデンブルク・ベルリン地方支部代表であったアレクサンダー・ローダ＝ローダ (Alexander Roda Roda, 1872-1945)⁵⁶を筆頭に、映画産業界、文筆業界から総勢十名の代表者で構成されていた。映画委員会に課せられた任務は、Gefa と協力して映画原稿の最低賃金の確立を目指すこと、さらに当時、SDS ブランデンブルク・ベルリン地方支部で代表ローダ＝ローダを中心に、大きな抗議運動に発展していた映画会社による文筆家への一方的な報酬削減策を最終的に解決することであった。しかし、この委員会はまもなくベルリンの SDS 会員の間で起こった共産主義系分離派グループと中央本部による政治性をめぐる内紛から結成わずか二ヶ月で解散するに至ってしまう⁵⁷。結局、ローダ＝ローダを中心とした SDS ブランデンブルク・ベルリン地方支部の有志十数名が、SDS とは別の労働共同体組織を形成し、独自の映画賃金に対する抗議運動を展開することとなった。

⁵³ ジャーナリスト、小説家。ベルリンで歴史、哲学を学んだ後、1909年に小説『花のヨブ』(„Blumenhiob“)を刊行し成功を収める。1920～21年には SDS 執行部の一員として大きな役割を担い、1921年からフィッシャー社の映画権部門の責任者を務め、映画界の発展にも尽力した。彼の小説や戯曲は、特に 1920年代後半以降、民族主義、国家主義的傾向を強め、33年以降は政府のプロパガンダとしても利用された。

⁵⁴ Kyser, Hans: Der Verrat am deutschen Schrifttum. Im: „Der Schriftsteller (Sondernummer)“ 1921. Ebd.; S. 24.

⁵⁶ 風刺作家、小説家、劇作家、カバレット芸人。ウィーンで法律を学び、一年志願兵として入隊して士官となった。1902年現役を去り、専らユーモア作家として創作に向かった。ベルリン、ミュンヘンなど各地を転々として、現代都市のカフェ文士としての生活を送り、1945年、ニューヨークで客死した。

⁵⁷ Der Schriftsteller. Zeitschrift des Schutzverbandes deutscher Schriftsteller. 1932.

SDS は、ラジオ、映画を文筆業の新たな活動領域ととらえ、メディア産業の隆盛に対し文筆家の権利擁護の立場からいち早く順応しようと試みたが、結局のところ、その後のナチスによる国家体制によってその試みは敢え無く崩れ去ることとなる。しかし、SDS がワイマール共和国期に行なったラジオ放送局、映画会社との利害問題をめぐる協議は、文筆業の利益代表機関としての存在を強く社会へアピールし、文筆家によっての新しい販路としてのラジオ、映画という意識を当時の文筆家に植え付ける突破口となったのである。特に、文筆家に著作権に関する法的知識を深めてもらう一種の「啓蒙活動」を率先して行い、文筆家主導で著作権独占会社を設立した SDS の功績は、今日の文筆業界におけるメディアとの関わりから見ても大きいと言える。SDS は、今日の文化形態であるラジオ、映画と文筆業との関わりモデルを提示し、これらの SDS の試みが戦後の文筆家団体、あるいは文筆家へ受け継がれたのであった。

では、三点目の活動についてみてゆこう。ワイマール共和国期に言論界全体を巻き込み、激しい抗議運動が起こった「俗悪・不潔文学」(Schmutz- und Schundliteratur)⁵⁸の問題は、当時の文筆業界に大きな波紋を投げかけることとなる。ワイマール憲法で制定された検閲法の撤廃、さらには表現の自由は、制定後、間もなくしてその曖昧さが浮き彫りとなった。実際、警察当局による作品の不当な差し押さえ、押収が全国各地で横行していた。SDS は、他団体と協力して抗議集会を開催し、政府に検閲紛いの差し押さえを即時撤廃するように求めた。そんな矢先、SDS だけではなく、当時の文筆業界全体を震撼させる訴訟事件が起こる。それは、1920 年末～22 年初頭に起きたアルトゥール・シュニッツラー (Arthur Schnitzler, 1862–1931) の『輪舞』 („Die Reigen“) の上演をめぐって文筆家側と裁判所側で争われた「輪舞訴訟」(Reigen-Prozeß) である。

SDS は、すぐさま文学有識者による「専門委員会」を設立し、訴訟に向けた対策を推進した。大規模な抗議運動に発展し、ドイツ演劇界を揺るがせた「輪舞訴訟」は、1921 年 11 月 10 日、文筆家代表として上演擁護派の急先鋒であったアルフレート・ケル (Alfred Kerr, 1867–1948)⁵⁹が主張した被告人擁護論により、結局、『輪舞』を上演した劇場支配人、並びに俳優に無罪判決が下されることで、一応その幕は下ろされたのである。しかし、この事件による傷はその後も残された。「輪舞訴訟」は、いわゆる「卑猥な」文学に対する文学訴訟の範例となった。一方、裁判の敗者側にとっては、ワイマール共和国の非道徳性と墮落を示す範例ともなったのである。当の作品の原作者であるシュニッツラーは、これを機に上演を断念してしまい、その後の上演を全て禁止した。結局、「輪舞訴訟」は、作品の上演をめぐって対立した賛成派と反対派の痛み分

⁵⁸ 「俗悪・不潔文学」についての研究は、中祢勝美：『ヴァイマル共和国の「俗悪・不潔」闘争 —— 「非公式の民族芸術」に対する了解 ——』独語独文学科研究年報 第 21 号 46～61 頁 (北海道大学 ドイツ語学・ドイツ文学研究会) が詳しい。

⁵⁹ 劇場批評家、エッセイスト、文筆家。ユダヤ系家庭に生まれ、ブレスラウで哲学、歴史、文学を学び、博士号取得後、ベルリンで文筆活動を開始。『新展望』 („Neue Rundschau“)、『ブレスラウ新聞』 („Breslauer Zeitung“) の文芸欄を担当し、1917 年には自作の詩、戯曲を出版。1919～33 年まで『ベルリン日報』 („Berliner Tageblatt“)、『フランクフルト新聞』 („Frankfurter Zeitung“) で劇場批評家として活躍。政治批判的な雑文書きとして一世を風靡した。

けとなり、SDS が専門委員会設立の際に掲げた「文筆家の社会的権利の擁護、並びにその作品の正当性を証明する」という目的は、ほとんど達せられずに終わってしまったのである。

SDS は、「輪舞訴訟」での失敗を受け、「文学作品の是非を下す裁判所組織の修正」、さらに『輪舞』上演をめぐる争いの原因であった刑法 184 条（通称、ハインツェ法案）⁶⁰の改正といった具体的な案を掲げて、文学訴訟の抜本的見直しを政府に迫っていくことになる。1923 年初頭、SDS 法律擁護委員会は、刑法 184 条に「学問的、芸術的、教育的意図を持った芸術作品には適用しない」という制限を加えるように再度、政府へ嘆願書を提出する。さらに同年 3 月、SDS 通常総会で代表カール・ブルケが、SDS のこれまでの急進的とも言える刑法 184 条一部改正へ向けた試みに柔軟性を与える譲歩案を提言した。この譲歩案とは、警察による差し押さえの際、裁判所に共同発言権を行使する権利が与えられた文学有識者による専門委員会を文部省の従属機関として設置し、この専門委員会が、最終的に検閲の撤廃、並びに刑法 184 条の改正の実現を目指すというものであった。ブルケの譲歩案はプロイセン政府に受け入れられ、これにより、SDS がワイマール共和国初期の検閲闘争で一貫して取り組んできた「差し押さえの際の文学有識者による専門委員会の設立」が実現されることとなったのである。しかし、このような検閲闘争における SDS の成果を一気に打ち消してしまうこととなる一大事件が 1926 年に勃発することとなる。

すでに 1925 年初頭頃から、帝国議会では、「青少年を低俗猥褻書物から保護する」(Bewahrung der Jugend vor Schmutz- und Schundschriften) ための新しい法案の成立を求める議論が、特に「中央党」(Zentrum)、「バイエルン人民党」(Bayerische Volkspartei: 略称 BVP)、「ドイツ国家国民党」(Deutschnationale Volkspartei: 略称 DNVP) 等の新旧キリスト教のモラルをかざす保守右翼系政党の間で活発に行なわれ、新たな検閲法の成立を求める機運が高まっていた。SDS は、この法律の成立直前まで激しい抗議運動を展開する。ドイツを代表する文筆業代表機関として、さらには当時の SDS 代表テオドーア・ホイスが、「ドイツ民主党」(Deutsche Demokratische Partei: 略称 DDP) 国会議員として政府に特別に設置された「法案特別審議委員会」のメンバーであったこともあり、法案成立阻止へ向けた抗議運動の牽引役として、ドイツ文筆業界から SDS へ寄せられた期待は大きかった。実際、ホイスの仲介により、SDS と法案特別審議委員会による話し合いの場が設けられ、いくつかの妥協点が見出された。しかし、ホイスが民主党の多数派工作に屈して法案に賛成票を投じ、1926 年 12 月、「有害出版物取締法」(Schmutz- und Schundgesetz) が成立することとなる。

SDS は、この「ホイス事件」(Fall Heuss) により、執行部と会員の間で軋轢が生じ、かつてない内部崩壊の危機にさらされることとなる。結局、ホイスは、同年 12 月 31 日、会員を大きな混乱と失望に陥れた責任をとる形で、任期半ばで SDS 代表を辞任することを表明したのであった。

⁶⁰ 原書は lex Heinze。1892 年に帝国議会に提案され、1900 年に成立。売春仲介者に対する裁判を契機に提案された帝国刑法の改正案であったが、やがて不道徳な書物の普及を犯罪構成要件とするまでに拡大されるようになった。

6. SDSの終焉（1933年以降）——ファシズムへの迎合とフランスへの亡命——

SDSは、ホイースの退陣劇があった1920年代後半から度重なる内部崩壊の危機にさらされ、組織の斜陽化の一途をたどる。それまで超党派の組織として文筆業界に君臨してきたSDSに翳りが見え始めたのである。1930年代に入ると、この傾向はますます顕著となる。1928年に共産主義系文筆家が政治的問題に立ち向かう目的で結成した文筆家組織「プロレタリア・革命文筆家同盟」（Bund proletarisch-revolutionärer Schriftsteller: 略称 BPRS）に同調を示す一部のSDS会員によって、1931年に「ドイツ文筆家保護連盟における反対派」（Oposition im Schutzverband deutscher Schriftsteller: OSDS）がベルリンで結成されたのである。このような事態に至ったのは、国家主義系の文筆家がSDSの組織運営の実権を握り、共産主義系の文筆家を組織から排除しようという動きが活発になったからであった。SDS執行部は、組織内に生まれた二大勢力である共産主義勢力と国家主義勢力の板挟みとなり、この組織の「政治化」により、SDSは、文筆業の利益代表機関としての本来の機能を失ってしまう。そして、1933年7月31日、ついにSDSは組織としての終焉を向かえ、ナチスにより統合された文筆家団体RDSへの吸収合併を余儀なくされたのであった⁶¹。

しかし、SDSが組織の終焉を迎えた後、ドイツ近隣諸国へ亡命を果たしたSDS会員により、文筆家組織が次々と結成されることとなる。その中でも最も有名であるのは、フランスへ亡命を果たした一部のSDS会員により、1933年10月31日、パリで結成されたSDS継承団体「亡命におけるSDS」（SDS im Exil）である⁶²。この組織は、1935年6月21日～25日までの五日間、パリで開催された反戦・反ファシズムと新しい文化創造を目指し、世界38カ国から250名の文筆家・知識人が参加した「第一回（文化の擁護のための）パリ国際作家大会」に参加するなど、ドイツ反ファシズム亡命文学の一大拠点として、戦後まで持続的な活動を展開したのであった⁶³。

7. 分析 —— SDSの組織活動（1909—1933）の総括 ——

このように、上記のSDSの活動史全体から、経済、法律、政治、新メディア産業等との連結によって職業文筆業の基礎整備が進められていった過程が見て取れる。つまり、職業文筆業を基礎形態とした権利獲得がSDSに体现され、19世紀後半から20世紀前半にかけてのドイツ文筆業界で大きな流れとなっていったのである。それはまた、同時に非職業的な文筆活動が非常態化されてゆく過程でもあった。職業身分の利益を効率良く支援保護しようとするならば、同業者の全てを統合して勢力を分散させないことが重要であり、対立する団体や補足的な組織は全て吸収するか消滅させる必要があったのである。こういった動きは未完ではあったが、はっきりとした

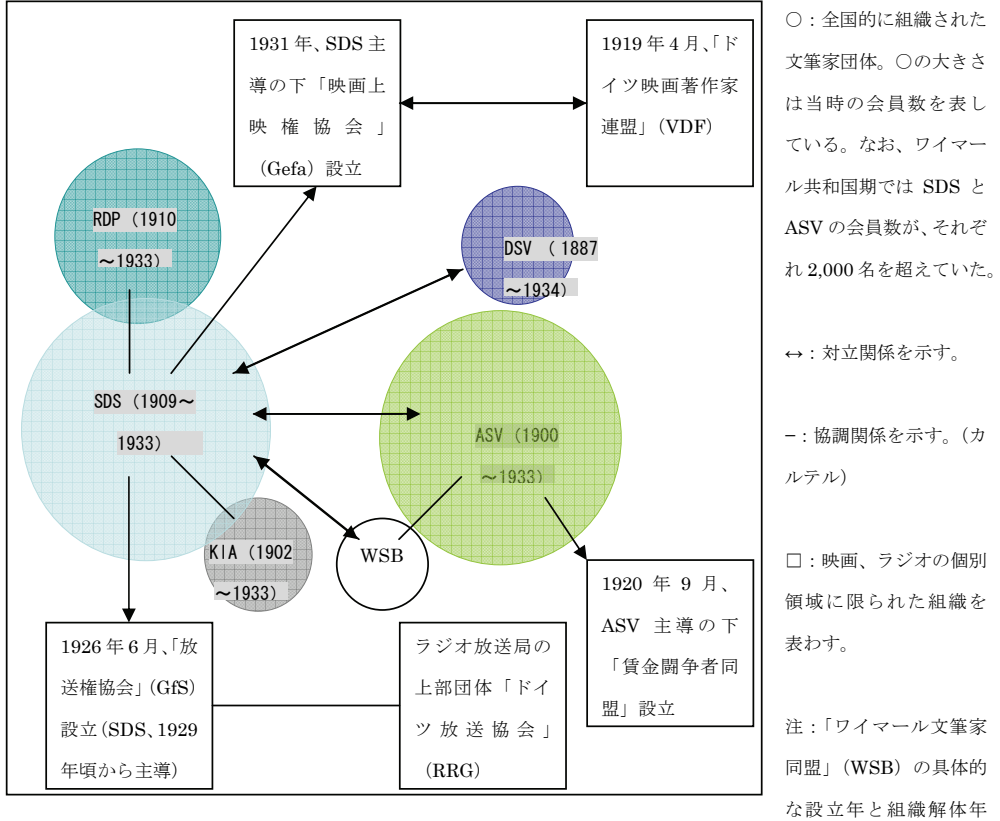
⁶¹ Vgl. Walter, Hans-Albert: Deutsche Exilliteratur 1933–1945. Band I: Bedrohung und Verfolgung bis 1933. Darmstadt und Neuwied 1972.

⁶² Schiller, Dieter: Der Pariser Schutzverband deutscher Schriftsteller. Eine antifaschistische Kulturorganisation im Exil. In: Vertreibung der Wissenschaften und andere Themen. Hrsg. im Auftrag der Gesellschaft für Exilforschung von Thomas Koebner. (Exilforschung. Ein internationales Jahrbuch Bd. 6) München 1988. S. 176.

⁶³ ジッド、アンドレ/マルロー、アンドレ/アラゴン、ルイ他：『文化の擁護 —— 1935年パリ国際作家大会 ——』法政大学出版局 1997年 353～355頁。

方向性を示していた。ここで、もう一度、SDSを取り巻く諸団体との相関関係とこれまでのSDSの文筆家の〈社会的統合化〉の歴史動向を図解と表で整理してみよう。

【図解】ワイマール共和国期のSDS周辺の競合団体、同盟団体の相関図



【表2】SDSの活動展開の時代別一覧（1909-1933）

	組織の成長	対決課題（出版業界、出版外メディア、検閲）	対社会状況（戦争、革命、社会運動）	文筆家（SDS会員）の意識・動向	その他
黎明期 （1909 - 1911）	1909年12月、ベルリンのカフェで数名の職業文筆家により文筆家利益団体「ドイツ文筆家保			1909年4月、ミュンヘンの地方紙『アルゲマイネ・ツァイトウング』紙上で繰り広げられた文筆業の本質を	

⁶⁴ Fischer, Ernst: Der Schutzverband deutscher Schriftsteller. S. 203-208.

	護連盟」(SDS)が結成される。 1911年3月、連盟綱領パンフレット『商品としての文学』刊行。			めぐる論争。ここでSDS設立の中心人物ハンス・ランツベルクは、文筆家は被雇用者であるという考え方を主張。彼の考えに賛同し、職業としての文筆業という共通認識をもつ。	
初期活動 (1911 - 1913)	地方支部を設立し、着実に会員数を増大。 職業文筆家だけではなく、職業専門として活動する雑誌編集者にも門戸を開く。(超党派的組織へ)	原稿の無料販売に反対して「新ドイツ出版界」(NDV)と対立。(闘争共同体の萌芽) ミュンヘン地方支部を中心に検閲局に対し大規模な抗議運動を展開。		ディレッタントの排除の厳格化。(競合団体との差別化を図る)	文学賞「クライスト基金」と「フォンターネ賞」の設立に尽力。
第一次世界大戦期 (1914 - 1918)	戦争によりますます困窮に喘ぐ会員を救済すべく金銭的支援、いわゆる社会福祉事業を展開。 他団体とカルテルを形成する試みが始まる。	1917年に他団体との協力により『ドイツの劇場の未来』を刊行。劇場関係者と文筆家の労働条件の改善へ向けて協議。(戦争の熱狂から本来の文筆業代表機関への帰還)	戦争勃発を機に1914年12月、『ドイツ兵士の本』刊行。さらにその二年後の1916年8月、『SDSの戦争フェイル』を刊行。	戦争支持の態度を表明し、戦時下での文筆家の知的指導者としての役割を社会へアピール。	
変革期 (1918 - 1920)	労働組合運動がドイツ全土で最高潮の盛り上がりを見せる中、1920年5月、労働組合へ組織転換。連盟綱領に労働条件の向上をうたった項目を追加。	「労働評議員」として出版社の経営方針に介入。	レーテ運動に積極的に関与。革命政府へ接近。	政治的知識人としての文筆家像。(バイエルンレーテ共和国樹立への関与、SDS代表ベルンハルト・ケラーマンによる『文筆家と共和国(1918)』)	

<p>ワイマール共和国 (1918ー1933)</p>	<p>会員数2,000名を擁し、ドイツを代表する文筆家組織へ変貌。 地方支部と並んで、小説家、エッセイスト、ラジオ・映画、叙情詩等による専門組織が SDS 内に設立される。 カルテルの構想をさらに発展させ、1927年に「ドイツ著作物帝国連盟」を設立し、ドイツ文筆業の統合を目指す。</p>	<p>インフレーションによる大不況の中、文筆家の利益保護のために「出版人協会」(Vereinigung der Verleger)と雇用条件について協議に入り、契約内容に関するトラブルを解決する機関「仲裁裁判所」の設置 「放送権協会」(GFS)で主導的役割を担い、さらに「映画上映権協会」(Gefa)を設立し、ラジオ、映画といった新メディア産業における文筆家の権利保護へ積極的に関与。</p>	<p>1926年に「有害出版物取締法」が制定され、SDS代表テオドール・ホイスが解任される事件により組織内で内紛が起こる。さらに、1920年代後半には、共産主義系、国家主義系による会員同士の対立が激化。超党派の組織を誇った SDS に翳りが見え始める。(組織の斜陽化)</p>	<p>政府を後ろ盾とした文筆家の社会的立場の向上を目指す。 (SDS代表アルフレート・デーブリン『文筆家と国家(1921)』)レーテ運動に引き続き、ワイマール共和国期を通して政治的知識人としての文筆家像を追い求めるが、ワイマール共和国末期には組織内で幾多の政治的方向性の対立が生まれ、それが、文筆家の権利保護、利益追求を掲げた文筆家労働組合 SDS の組織終焉のきっかけとなった。</p>	
<p>組織の終焉とその後 (1933年以降)</p>	<p>1933年7月、組織の解体。ナチスによって統合された「ドイツ文筆家帝国連盟」(RDS)へ吸収合併。同年10月、フランス、パリで継承団体「亡命における SDS」結成。</p>			<p>1935年、パリで開催された「第一回文化の擁護のためのパリ国際作家大会」にドイツ亡命文筆家団体代表として参加。</p>	

8. まとめ —— 社会的存在としての文筆家 ——

こうして SDS の活動史を概観すると、SDS の「組織」としての活動の変遷とその活動を支えた「個人」である文筆家の社会的意識の変遷といった二つのポイントが浮かび上がってくる。出版社、新聞社といった強力な資本力をもった相手との経済利潤をめぐる駆け引き、著作物の法的保護制度の整備、不許複製や検閲に反対する大規模な抗議運動、ワイマール共和国期に展開した

新たなマス・メディア産業との文筆家の活動領域の拡大を目指した連携、文筆家の労働条件の改善を掲げた労働闘争といった設立から解体に至るまで展開した SDS の組織活動は、社会的なものとしての文筆業を強く印象づけるものであり、それは、文筆業の〈社会的統合化〉という言葉に集約することができるだろう。実際、こういった SDS の組織活動は、第二次世界大戦後に新たにドイツで結成された文筆家団体に継承され、今日のメディアとの文筆家の関わり方に一つの指針を示し続けている⁶⁵。この点から、SDS の活動形態は、現在のドイツにおける文筆家組織の原型であり、文筆家団体史に大きな足跡を残したと言える。

次に、SDS の活動を支えた文筆家個人の社会的自覚も変化し、各時代でそれなりの幅があったが、彼らのこうした自覚の根底にあるものは、どの時代も社会的存在としての文筆家像であったことがわかる。文筆家とは文化の担い手、つまり、新しい独自の価値、意味、認識、情報を提供・提案することを自らの存在価値とするような人々のことである。19 世紀後半から 20 世紀前半までにおいて文筆家たちの間には知的指導者としての自己意識は高く、その自己意識は SDS の場合、職業としての文筆業から出発し、第一次世界大戦ではそれが戦争賛美の方向にも動き、あるいはレーテ運動で主導的役割を担おうとする意識にも繋がった。さらにワイマール共和国末期には、政治的指導者としての文筆家の役割から幾多の政治的方向性の対立が組織内で起こり、それが文筆家団体 SDS の終焉のきっかけとなったのである。このように、文筆家の知的指導者としての自覚とそれに基づいた行動は、文化・言論生産者である文筆家が先天的にもっている社会性を如実に物語るものであり、この文筆家のもつ社会性が文筆家団体 SDS の活動に具現化されたのである。換言すると、SDS の活動は、個人レベルでの文筆家の社会性を組織に投影させたものであり、この社会性が組織レベルで文筆業の〈社会的統合化〉という試みとなって表出し、当時の社会で確固とした活動領域を獲得したと言えるのではないだろうか。

したがって、SDS が結成から解体まで展開した文筆家の〈社会的統合化〉を図る幾多の試みは、世紀転換期からワイマール共和国期にかけての政治、社会、文化と文学の相互作用を探る上で格好の例証であると共に、当時の文学史の単なる断片ではなく、今日的な意味での文化の担い手としての文筆家の社会性という点から、その後の文筆業、あるいは社会の中で活動する文筆家に多大な影響を与え、現代の文筆業へ繋がる軌跡であったのである。

(北海道大学大学院文学研究科博士後期課程／日本学術振興会特別研究員)

本稿は、2006 年 6 月 3 日～4 日に開催された日本独文学会春季研究発表会における発表、ならびに博士論文『ドイツ文筆家保護連盟 (Schutzverband Deutscher Schriftsteller: SDS) 活動史 (1909-1933) —— 世紀転換期からワイマール共和国期にかけての文学活動 ——』を要約したものである。

⁶⁵ 1969 年にハインリッヒ・ベル (Heinrich Böll, 1917-1985)、ギュンター・グラス (Günter Grass, 1927-) らによって設立された文筆家団体「ドイツ文筆家連盟」(Verband deutscher Schriftsteller: 略称 VS) は、会員の政治的・美的立場の違いや文筆家としての知名度の差を越えて、肥大化する文化産業の圧力から文筆家としての職業上の利益を保護しようとした点で SDS によって始めて結成された文筆家労働組合を模している。さらに、1973 年に VS から分離独立して結成された「自由ドイツ著作家連盟」(Freier Deutscher Autorenverband: 略称 FDA) は、正式名称の隣に「ドイツ文筆家保護連盟」と記し、SDS の伝統を継承していることを強調している。両団体は、文筆業の社会的発展のために、文筆家の職業上の保護、文学基金の設立、文筆家の社会貢献に取り組み、現在もなお幅広い活動を展開している。